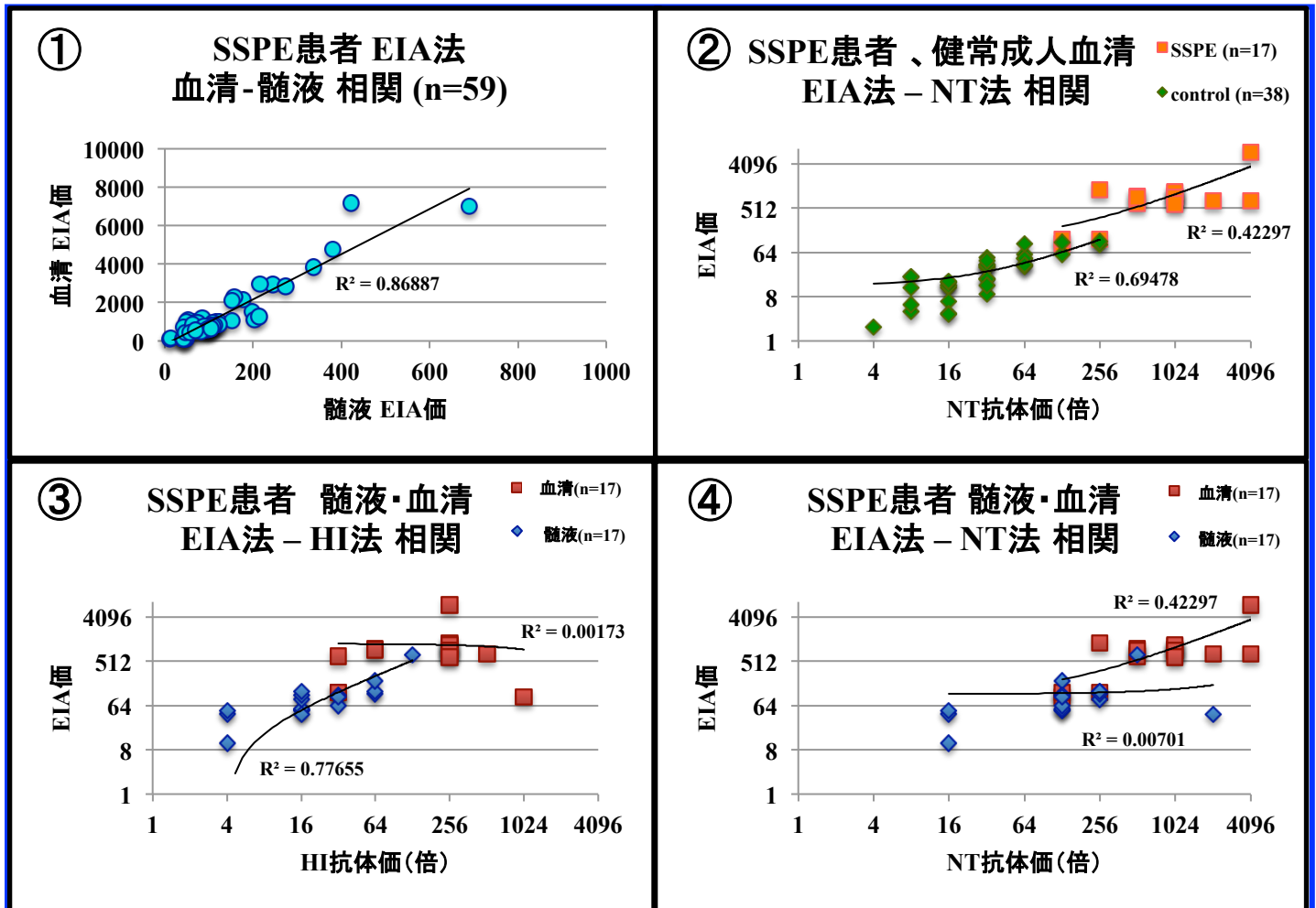


亜急性硬化性全脳炎3例と健常成人における 血清-髄液間、測定法間の相関について

研究分担者：福島県立医科大学小児科学講座 細矢光亮



解 説

1. 亜急性硬化性全脳炎(SSPE)は、麻疹ウイルス変異株の持続感染による遅発性ウイルス感染症である。診断において、麻疹特異抗体価が用いられているが、明確な基準がない。「診断基準の策定・改訂」へ向けた麻疹特異抗体価の検討が必要である。
2. 当科で治療中のSSPE患者3名と健常成人(control)38名を対象とし、血清および髄液中の麻疹特異抗体価について、酵素免疫法(EIA法)と赤血球凝集抑制反応法(HI法)、中和抗体反応法(NT法)を用いて、血清-髄液間、測定法間の相関を検討した。
3. ①EIA法でのSSPE患者の血清と髄液との検討では、互いに強い相関が認められた。
②SSPE患者、controlの血清を用いたEIA法とNT法との検討では、controlに比べSSPE患者は、抗体価が著明に高値であった。また、各測定法間で正の相関が認められた。
③④SSPE患者の血清、髄液を用いた測定法間の検討では、EIA-HI間、EIA-NT間ともに相関にばらつきが認められた。